西湖主

田中貢太郎

青空文庫

陳弼教は幼な名を明允といっていた。燕の人であった。家が貧乏であったから、副将軍賈綰の秘書になっていた。ある時賈に従って洞庭に舟がかりをしていると、たまたま大きな猪婆龍が水の上に浮いた。賈はそれを見て弓で射た。矢はその背に中った。他に小さな魚がいて龍のしっ尾を銜んで逃げなかった。そこで龍とその魚を獲って、じょうをおろして帆柱の間に置いてあったが、二つとも微かに息があった。そして龍は吻を開けたり閉じたりしてたすけを求めているようであった。陳は気の毒になって賈に請うて逃がしてやることにしたが、金創の薬を持っていたから、じょうだん半分にそれをつけて、水の中へ放してやった。龍と魚は長い間浮いていてそして沈んで往った。

後一年あまりして陳は北へ帰ったが、また洞庭を通ったところで、大風が吹いて乗っている舟が覆ってしまった。陳は幸いにして竹の箱があったので、それにすがって一晩中流れていて、木にかかって止った。そこで岸へ這いあがっていると一つの尸が流れてきた。それは自分の伴れていた従僕の少年の屍であった。陳は力を出して引きあげたが、もう死んでいた。

陳は疲労と悲しみで生きた心地もしなかった。彼は従僕の屍を前にして吐息していた。そこには樹木の茂った小山があり、小さな柳の枝が風のたびに緑の色をうごかすばかりであった。人通りがないので途を聞くこともできなかった。夜の明け方から辰の刻すぎまで坐っていたところで、不意に従僕の体が動きだした。陳は喜んでそれを撫でた。間もなく従僕はたくさん水

を吐いて、夢の醒めたように蘇生した。そこで二人は濡れていた着物を脱いで石の上に乾したが、午近くなってやっと燥いた。二人はやがてそれを着たが、昨日から何も喫っていないので、腹がごろごろ鳴ってひもじくてこらえられなかった。

そこで二人は人家のある方へ往こうと思って、急いで山を越えて往った。山の半ばまで往ったところで、矢の音がした。陳は足を止めて耳をすました。と、馬の蹬音がして二人の女郎が駿馬に乗って駈けてきた。二人とも紅い※の鉢巻をして、髻に雉の尾を挿し、紫の小袖を着、腰に緑の錦を束ね、一方の手に弾を持ち、一方の手に青い臂かけをしていた。その二人が嶺の南を駈けて往くと、二三十騎の者が後から続いた。林の中に猟をしていた一行であろう、皆美しい女ばかりで装束もおんなじであった。

陳は大事をとって動かなかった。騎馬の後から男の駈けてくるのが見えた。それは馭卒のようであった。陳はその馭卒の方へ往って、

「今、通ったのは何方です」

と訊いてみた。馭卒は言った。

「あれは西湖の王様じゃ、首山に猟をなされておるところじゃ」

陳は自分がそこへ来た故を知らして、そのうえ飢えていることを話した。馭卒は裹糧を解いて食物を分けてくれて、そして注意した。

「遠くの方へさけなくちゃいけない、車駕を犯すと死刑になるからな」

陳は懼れて従僕を伴れて山を走りおりた。山の麓の林の中に宮殿のような建物がちらと見えた。陳は寺だと思ったので、その方へ歩いて往った。周囲に白亜の垣をめぐらした建物で、渓の水が流れ、朱塗の門が半ば啓いて、それには石橋が通じていた。門の扉にのぼって中を窺いた。それは大小の建物が雲に聳えて王宮の庭のようであった。陳はそこでまたこれは貴族の庭ではなかろうかと思った。

陳はためらいためらい入って往った。花の咲いた藤が一面に這うて、花の香がむっと匂うてきた。曲欄を幾まがりか折れて往くとまた別の庭があって、枝を垂れた数十株の楊柳が高だかと朱の簷を撫でていた。そして名も知れぬ山鳥が一鳴きすると花片が一斉に散った。奥深い花苑には微かに風が渡って、楡の実がひとりでに落ちた。それは目を悦ばし心を愉快にするところで、どうしても人間の世にある庭ではなかった。

陳はその庭を通って小さな亭の傍へ往った。そこに鞦韆の架があったが、それは雲と同じ高さのもので、その索はひっそりと垂れていた。陳はそこで此所は閨閣に近い所ではないかと思った。陳はおそろしくなったので前へ往かなかった。

不意に馬の蹄音が門の方に聞えてきた。女の笑声も微かに聞えてきた。陳は従僕とそっと花苑の中へ隠れた。間もなく女の笑声がだんだん近づいてきた。その時一人の女の声が言った。

「今日の猟は面白くなかった、鳥が獲れなかったから」

するとまた一人の女の声が言った。

「公主が雁をお獲りあそばさなかったなら、何も獲れないで、馬を労するだけでしたが」

間もなく紅い装束した数人の女が一人の女郎に従いてきて、亭に入って腰をかけた。女郎は短い袖の軍装束で年は十四五であろう、おさげにした髪は霧のかかったようで、細そりした腰は風にもたえないように見えた。それは花でもくらべものにならない美しさであった。傍の女達は茶をくみ香を焚いたが、遠くから見ると錦をつかみかさねたように輝いて見えた。暫くして女郎は起って階段をおりて往った。一人の女が言った。

「公主はお馬でお疲れになっておりますのに、それでも鞦韆をあそばされますか」

女郎は笑って頷いた。とうとう侍女達はその公主を肩に乗せ、臂を捉り、裾を※げ、履を持って鞦韆の上に乗せた。公主は白い腕を舒べ、端の尖った※をはいて、軽く燕の飛ぶように空を蹴って、雲の上まで身を飛ばしていたが、間もなくやめて侍女達に扶けられて下におりた。侍女達は口ぐちに言った。

「公主は真の仙人でございます」

そして皆で※々と笑いながら往ってしまった。陳は花苑の中から女達の方を見ているうちに、魂がぬけでたようになっていたが、そのうちに人声がもうしなくなったので、這い出して鞦韆の架の下へ往き、そのあたりを歩きながら女のことを考えていた。籬の下に紅い巾の落ちているのが見えた。陳は女の何人かが落して往ったのだろうと思って、喜んで袖の中に入れて、亭の中へあがって往った。そこには案の上に硯や筆が備えてあった。陳はとうとうその巾に詩を

題した。

雅戯何人か半仙に擬する
分明なり瓊女金蓮を散ず
広寒隊裏応に相※むべし
信ずるなかれ凌波便ち天に上るを

詩ができると陳はそれを口にしながら出て、はじめの径から引返して往った。門の扉はもうぴったりと締っていた。陳はこまってしまった。そこで建物から建物を探して出口を見つけようとしたが見つからなかった。一人の女が不意に入ってきたが、びっくりして訊いた。

「どうして此所へいらしたのです」

陳は礼をして言った。

「路を間違えてまいりました、どうか助けてください」

女は訊いた。

「紅い巾を拾わないでしょうか」

陳は、

「拾いました、それに、それをよごしました」

と言って、巾を出した。女はそれを受け取ってひどく驚いて言った。
「それは大変です、これは公主のお持ちになるものです、これをこんなにいたずらしては大変です」
陳は色を失った。
「どうしたら赦(ゆる)していただけましょう」
女は言った。
「宮殿の中へ忍びこんだ罪ばかりでものがれることができないですが、あなたは儒冠(じゅかん)の書生さんで、おとなしい方だから、そればかりなら、どうにかしてお助けすることができたのですが、わざわざこんないたずらをしては、どうすることもできないです」
女は巾を持ってあたふたと往ってしまった。陳は心がふるえて肌に粟ができた。彼は自分の体に翅(つばさ)のないことを恨んだ。彼は殺されるのを待つより他にしかたがなかった。
やや暫くして初めの女がまた来て、そっと言った。
「お喜びなさい、あなたは命が助かるかも解らないです、公主は巾を三遍も四遍もくりかえして御覧になって、お笑い遊ばされて、べつにお怒りになった御容子(ごようす)も見えないですから、ついすると赦していただくことができますよ、すこし辛抱しているがいいのです、逃げ出したりなんかしてはいけないです、それで見つかろうものなら今度は赦してもらうことができないですから」

日がもう入りかけていた。陳は女の往った後でまだ凶とも吉とも定まらない自分の運命を考えて苦しんだが、それよりも苦しいのは、いれつくような空腹のくるしさであった。陳は恐れと餓えで生きた心地がしなかった。間もなく女は燈を持って入ってきたが、その後ろから壷を提げて従いてきた婢(じょちゅう)は、酒と食物を出して陳に喫わした。陳はせきこんで訊いた。

「どうなったでしょう、赦していただけませんか」

女は言った。

「さっきすきを見て、庭にいる秀才をどういたしましょう、怨(ゆる)しておやり遊ばすなら帰してやりましょう、そうしないと餓えて死にますと申しあげたら、公主はじっとお考えになって、夜になって何所へも往かす所はないではないかとおっしゃって、とうとう私に食物を持って往ってやれというお言葉がありました、これは悪いしらせではありません」

陳と従僕はやっと食事をすることができた。しかし、陳はまだ心配でたまらないので終夜眠らないでさまよい歩いた。朝になって辰の刻がすぎようとしたところで、かの女がまた食物を持ってきてくれた。陳は言った。

「公主様のお気にさわらないようにして、ねがってください」

女は言った。

「公主は殺せともおおせられないが、また赦せともおおせられないです、私達しもじもの者は、何度も何度も申しあげることはできないです」

そのうちに陽が西にまわった。陳は赦されるのを待ちかねていた。と、たちまちかの女が息せわしくはしってきて言った。

「大変です、おしゃべりさんが、王妃に申しあげたものだから、王妃は巾をなげつけて、気ちがいの下人とお怒りになっておられます、もうどうすることもできないです」

陳は大いに驚いた。顔の色は灰のようになってひざまずいてどうしたなら罪を免れることができるだろうかと言って教えを請うた。と、たちまち人声ががやがやとして聞えてきた。女は手をふってそっと逃げて往った。三四人の者が索を持ってさわがしく入ってきた。そのうちの一人がじっと陳を見て言った。

「何人(だれ)かと思ったら陳さんではありませんか」

そこで索を持っている者を止めて、

「まあ、待ってください、王妃に申しあげてまいります」

と言って、引返して走って往ったが、すぐ帰ってきて言った。

「王妃が陳さんのいらっしゃるのをお待ち申しておられます」

陳はわなわな顫えながら従いて往った。たくさんの門をすぎて一つの宮殿へ往った。碧の箔(みどりすだれ)を銀の鉤(かぎ)でかけた所に美しい女がいた。それが王妃であった。陳を伴れて往った女は、

「陳さんを召しつれました」

と言った。すると光りかがやく衣裳をつけていた王妃が目をあげた。陳は地べたに額をすり

つけて言った。
「私は旅をしておる者でございます、どうか生命をお助けください」
王妃は急いで起ってきて、陳の手を執って上にあげて言った。
「私は、あなたがなかったなら、今日のないものです、婢達は何も知らないから、大事のお客様をお苦しめして、申しわけがありません」
そこで華やかな酒宴の席を設けて、玉をちりばめた杯に酒を酌んで陳をもてなした。陳はその故が解らないので茫然としていた。王妃は言った。
「再生の御恩に対して、他に御恩返しをすることができないのを残念に思いますが、ただ女が詩を書いていただいて、あなたに可愛がっていただきましたから、天縁であろうと思います、今晩、あなたのお傍にさしあげることにいたします」
陳は思いもよらない、そして、意味の解らない幸福にぶっつかって、心がうっとりして落ちつかなかった。
日がはや暮れてしまった。一人の侍女が来て言った。
「公主はもうお準備ができました」
侍女は陳を案内して式場へ往った。と、たちまち笙や笛の音がにぎやかに聞えだした。階上には一めんに花毛氈を敷いて、室の中も門口も、垣根も便所も、皆燈籠を点けてあった。三四十人の麗しい女が公主を扶けて入ってきてかわるがわる拝をした。麝香の気が殿上から殿外に

溢れた。

そこで陳と公主は手を引きあって幃に入った。陳は言った。

「私は旅の者で、まだ一度もお目みえしたこともないうえに、大切な巾を汚して、罪をのがれることができたなら幸いだと思っていたのです、結婚を許していただくとは思いもよらないことです」

公主が言った。

「私の母は、湖君の王妃でございます、すなわち江陽王の女でございます。昨年里がえりをする途で、湖の上で游んでいて、流矢に中って、あなたによって脱れることができました、そのうえに金創の薬までいただきました、一門は皆あなたの御恩を感謝しております、どうか人間でないということで疑わないようにしてくださいまし、私は龍君に従うて長生の術を授けられております、あなたと生涯を共にしましょう」

陳はそこで公主も王妃も神人であるということをさとった。そこで陳は訊いた。

「きみは、どうしてそれを精しく知っているのです」

公主は言った。

「あの日洞庭で、小さな魚がいて、尾を銜んでいたでしょう、それがこの私です」

陳はまた訊いた。

「殺しもしないのに、なぜぐずぐずして早く赦してくれなかったのです」

公主は笑って言った。
「あなたを愛しておりましたが、ただ自分勝手にできないものですから、一晩中心配しておりました、他の人の知らないことですから」
陳は歎息して言った。
「きみは、僕のための鮑叔(ほうしゅく)だ、そして、あの食物を持ってきてくれた者は、何人ですか」
公主は言った。
「阿念(おねん)といいます、これも私の腹心の者です」
陳は言った。
「何をもって私に報いてくれます」
公主は笑った。
「あなたを長いことお待ちしました、これから責めをふさぐようにしても、おそくはないでしょう」
陳は訊いた。
「大王は何所にいらっしゃるのです」
公主は言った。
「関帝に従って蚩尤(しゆう)の征伐に往って、まだ帰りません」
四五日いるうちに、陳は自分の家のことが気になってしかたがないので、そこでまず平安無

事を報ずる書を作って従僕を帰した。陳の家では洞庭で舟が覆ったということを聞いて、妻子はもう一年あまりも喪に服していたが、従僕が帰ったので、はじめて死んでいないことを知った。しかし家からは音信することができないので、終に他郷に漂白して帰ることができないだろうと心配していたが、それから半年ばかりして陳が不意に帰ってきた。肥えた馬、軽い裘、ひどく立派な旅装をしていたが、嚢中には宝玉がみちていた。

陳の家はそれがために巨富の富ができた。陳はそれから豪奢な生活をはじめたが、旧家の人もそれには及ばなかった。七八年の間に五人の児を生んだ。陳は毎日賓客を招いて饗宴を張ったが、室から料理から豊盛の極を尽していた。陳に向ってその境遇のことを訊く者があると、すこしも忌憚らずに話した。

陳の幼な友達に梁子俊という者があった。南方へ往って官吏をしていて、十余年目に故郷へ帰ってきたが、洞庭を舟で通っていると、一艘の画舫がいた。それは檻に雕彫をした朱の窓の見える美しい舟であったが、中から笙に合せて歌う歌声がかすかに聞えていた。水の上には霞がかかってあるかないかの波が緩く画舫にからんでいた。その時美しい女があってその画舫の窓を啓けてそこに憑れながら四辺を眺めた。梁は画舫の中へ目をやった。一人の少年が股を重ねて坐り、その傍に十五六の美しい女がいて、少年の肩をもんでいた。梁は楚の襄王のような貴人であろうとおもったが、それにしては従者がひどくすくなかった。梁は眸を凝らしてじっと見た。それは幼な友達の陳明允であった。

「陳君じゃないか」

梁は覚えず体を舟の欄に出して大声に言った。陳は梁の呼ぶ声を聞いて、棹を罷めさして水鳥の象を画いた舳に出て、梁を迎えて舟をやった。舟の中には喫いあらした肴が一ぱいあって、酒の匂いがたちこめていた。陳はすぐ言いつけてそれをさげさしたが、間もなく美しい侍女が三五人来て、酒をすすめ茗を烹た。そこに山海の珍味が並べられたが、まだ一度も見たことのないものであった。梁は驚いて言った。

「十年見ざるまに、どうしてこんなに富貴になったかね」

陳は笑って言った。

「君は依然として窮措大だね、まだ世に出ることができないね」

梁は言った。

「さっき、君と酒を飲んでいたのは、何人だね」

陳は言った。

「僕の家内だよ」

梁はまたそれを不思議に思った。梁は言った。

「一家を伴れて何所へ往くのだ」

陳は言った。

「西の方へ往こうとしているのだ」

梁は再び訊こうとした。陳は急に侍女に命じて歌を歌って酒をすすめさした。陳の一言が畢(おわ)るか畢らないかに、音楽の声が舟をゆるがすように起った。歌の声と笙や笛の音が入り乱れて騒がしくなって、もう話も笑声も聞くことができなかった。梁は美しい女が前に満ちているのを見て、酔に乗じて言った。

「明允公、僕に一人美人を贈らないかね」

陳は笑って、

「足下は大いに酔ったな、しかし、いいとも、一人の美しい妾を買う金を昔のよしみに贈ろう」と言って、侍女に命じて明珠を一つ持ってこさして、梁に贈った。

「緑珠でも購(あがな)えないことはないよ」

そこで陳は梁に別れをうながして言った。

「すこし忙しいことがある、旧友と長くいっしょにいられないのは残念だ」

梁を送って舟に返し、もやいを解いて往ってしまった。

梁は故郷へ帰って陳の家へ探りに往った。陳はその時家で客と飲んでいた。梁はますます不思議であるから、そこで訊いた。

「君はこの間、洞庭にいたじゃないか、どうしてそんなに早く帰れたのだ」

陳は言った。

「そんなことはないよ、僕は家にいたよ」

梁はそこで、自分の見たままのことをはなした。それを聞いて一座の者は皆駭(おどろ)いた。陳は笑って言った。

「そりゃ何かの間違いだよ、僕にどうして分身の術があるのだ」

皆はそれを不思議に思ったが、その故を知ることはできなかった。陳は後に八十一歳で亡くなったが、葬式の時に棺が軽いので、開いて見ると空であった。

青空文庫情報

底本：「中国の怪談（二）」河出文庫、河出書房新社
　1987（昭和62）年8月4日初版発行
底本の親本：「支那怪談全集」桃源社
　1970（昭和45）年発行
※疑問箇所の確認にあたっては、底本の親本を参照しました。
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2004年11月3日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西湖主

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/